

「神の賜物は永遠の命」

2018年09月19日

ローマの信徒への手紙 6章 15節～23節 では、どうなのか。わたしたちは、律法の下ではなく恵みの下にいるのだから、罪を犯してよいということでしょうか。決してそうではない。知らないのですか。あなたがたは、だれかに奴隷として従えば、その従っている人の奴隷となる。つまり、あなたがたは罪に仕える奴隷となって死に至るか、神に従順に仕える奴隷となって義に至るか、どちらかなのです。しかし、神に感謝します。あなたがたは、かつては罪の奴隷でしたが、今は伝えられた教えの規範を受け入れ、それに心から従うようになり、罪から解放され、義に仕えるようになりました。あなたがたの肉の弱さを考慮して、分かりやすく説明しているのです。かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい。あなたがたは、罪の奴隷であったときは、義に対しては自由の身でした。では、そのころ、どんな実りがありましたか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものです。それらの行き着くところは、死にほかならない。あなたがたは、今は罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいます。行き着くところは、永遠の命です。罪が支払う報酬は死です。しかし、神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスによる永遠の命なのです。

パウロは、私たちは律法の下ではなく、恵みの下にいると語った。恵みの下にいるので、何をしても構わず、罪を犯してもいいのか。「決してそうではない。」誰かに奴隷として従えば、その人の奴隷である。つまり、罪に仕える奴隷になれば、死に至るし、神に従順に仕える奴隷になれば、義に至る。仕える主人が罪か神かによって、死か義に分かたれる。しかし、感謝すべきことに、あなたがたは、かつては罪の奴隷であったが、今は伝えられた福音を受け入れ、心から神に仕えるようになり、罪から解放され、義に仕える者になりました。

あなたがたの肉の弱さを考慮して、分かりやすく説明しているが、「かつて自分の五体を汚れと不法の奴隷として、不法の中に生きていたように、今これを義の奴隷として献げて、聖なる生活を送りなさい。」あなたがたは、罪の奴隷であった時は、汚れと不法の中を生きていた。その頃、どんな実りがあったか。あなたがたが今では恥ずかしいと思うものばかりであった。それらの行き着くところは、死の他になかった。しかし今は、自分の五体を義の奴隷として献げているので、罪から解放されて神の奴隷となり、聖なる生活の実を結んでいる。その行き着くところは、永遠の命である。

罪が支払う報酬は死である。律法の下では、律法を守ったと誇り、守れなかったと卑屈になり、心は上下の落差に苦しみ、平安はない。また、律法を守った者と守れない者が、互いに競い合い、差別と序列化を生み出す。律法の下では喜びや平安はなく、死に至るのみである。しかし、神の賜物、イエス・キリストの真実（十字架と復活）によって、罪が赦され、義が宣告され、神と結びつき、永遠の命をいただいている。私たちは神に根拠を置く者とされている。この喜び、解放は何にも勝る救いである。

私の場合、パウロのような律法に基づく罪の認識はなかった。しかし、足元が崩れ去っていく虚無の思いに捕らわれた。キリストの真実によって、神から「生きてよし」との是認宣言を聞き、この身が永遠の命に与っていると信じ、生きることへの勇気を与えられた。